



Title	ウォーターフロントエリアにおける新旧市街地の連結型景観デザイン手法に関する研究
Author(s)	鄭, 珪溶
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42086
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 6 】

氏 名	鄭 真 溶
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 14877 号
学位授与年月日	平成 11 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科 環境工学専攻
学位論文名	ウォーターフロントエリアにおける新旧市街地の連結型景観デザイン手法に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 鳴海 邦碩 (副査) 教授 笠田 剛史 助教授 草間 晴幸

論文内容の要旨

本論文は、ウォーターフロントエリアに建設される新市街地を景観的な魅力を備えた環境として形成するための手法を確立することを目的に、景観デザインという手法に着目し、既成市街地と新市街地の景観整備を関連づける連結型景観デザインという整備概念を明らかにすることを通じて、海、新開発地、既成市街地の環境的な特性に基づいた景観デザインを行うための課題と手法を論じたもので、内容は 6 章からなる。

第 1 章では、研究の背景と目的、用語の定義ならびに論文の構成を述べている。

第 2 章では、六甲アイランド、福岡シーサイドももち、幕張新都心住宅地区、横浜みなとみらい 21 の景観ガイドラインを事例にとりあげ、その景観デザインの対象および手法を比転分析することによって、埋立地である新市街地の場所性を活かした都市景観像や街区の形成手法を考察し、そこから導き出される連結型景観デザインの手法について論じている。

第 3 章では、泉佐野市りんくうタウンを事例に、コンピューター支援による都市イメージの検討を含む景観整備基本方針の策定過程と、その都市イメージを実現するための景観デザイン目標の策定過程を分析するとともに、街区レベルでのより詳細な景観形成目標とその誘導策について商業業務ゾーンを取り上げて分析し、これらに基づいて大規模開発における連結型景観デザインの課題と手法について考察している。

第 4 章では、ウォーターフロントの背後に広がる既成市街地の事例として神戸市東灘区魚崎地区を取り上げ、震災復興計画の策定で用いられたコンピューター支援システムによる景観デザインの可能性を考察するとともに、景観資源をネットワークすることによって、既成市街地、ウォーターフロントエリア、新規埋立地の 3 ゾーンを景観的に連結することの可能性について論じている。

第 5 章では、韓国の仁川を事例とし、ウォーターフロントエリアにおける港湾施設と旧市街地との関係を軸に開港初期の都市形成過程を分析し、それに基づいて既成市街地を含むウォーターフロントエリアの景観構造を抽出し、今後の埋立開発によって形成される松島情報化新都市および仁川新国際空港の背後都市の都市像や景観デザイン目標を考察している。さらにその知見をもとに、新市街地と既成市街地の景観連結のデザイン提案を試みている。

第6章では、以上の考察で得られた知見を取りまとめるとともに、ウォーターフロントエリアにおける新市街地と既成市街地の景観連結の考え方を景観ガイドラインの基本方針として示すことを提案している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ウォーターフロントエリアにおける新旧市街地の景観を関連づける整備手法を連結型景観デザインと定義し、韓国仁川市の松島情報化新都市および仁川新国際空港の背後都市に対してこの連結型景観デザインを計画提案することを目指し、日本におけるウォーターフロント開発の先進的な事例を分析対象に取り上げ、海、新開発地、既成市街地のそれぞれの環境的特性に基づいた景観デザインの手法を分析することを通じて、連結型景観デザインの対象と課題並びにデザイン手法を考察した知見をとりまとめたものである。得られた結果を要約すると、以下の通りである。

- (1)事例とした日本の先進的な開発事例では、それぞれに開発時期に相応しい開発目標が設定されつつも開発地全体でまとまりをつくる景観デザインが目指され、その上で、既成市街地から新開発地を通過し海まで到達するアクセスを設けることによって海と新開発地と既成市街地の連続性をつくり出す手法が共通して存在すること、さらにこの街路に沿う建物形態やその周辺ゾーンに対して線的・面的なデザイン規制を行い、海への通景空間を確保する連結型景観デザイン手法が取られていることを明らかにしている。
- (2)ウォーターフロント背後地の環境分析を通じて、既成市街地と新市街地との景観連結を行うためには、既成市街地における景観資源として歴史的建造物、公園、広場等の人工的要素のみならず、水空間、緑等の自然的要素や、光、空気等の環境的要素を把握する必要があることを明らかにするとともに、それらを一つの景観軸上にデザインすることによって景観連結を誘導する可能性があることを明示している。
- (3)大規模開発における景観デザインの提案事例の分析を通じて、歴史的な景観要素をもたない新市街地では周囲の自然的景観要素と一体的にデザインすることによる景観連結の手法が求められることを明らかにし、その上で、設定されたまとまりのある景観ゾーンごとに街区形成の誘導方策を同時に用意すべきこと、街区単位で建物の形態や配置あるいは色彩のコントロールなどを図るべきこと、さらにこれらの誘導手法として、建物群スカイラインや街路景観並びに広域的なヴィスタポイントの創出などに着目して景観のまとまりをデザインする手法が有効であることなどを明示している。
- (4)新市街地と既成市街地にわたる広域エリアでの連結型景観デザインでは、両者にまたがる景観軸を中心に景観形成を誘導する手法が有効であり、そのためには、街路軸沿いに景観ガイドラインを用意することが有効であること、このガイドライン策定のための基本方針を設けることが有効であること、その場合、景観形成軸と景観保存軸の両者を広域の景観構造のなかに位置づけることが重要であることなどを明示している。こうした基本方針の策定を効率的に展開し、かつ様々な主体間で合意できる内容にまとめあげるために、C.G.を援用して景観ストラクチャーや予想される景観像をあらかじめ視覚化することが有効であることを明示している。
以上のように、本論文は、ウォーターフロントエリアにおける新旧市街地の景観デザイン手法の分析を通じて、海、新開発地、既成市街地の3地区を景観的に連結する視点を提示するとともに、都市環境デザインにおいて連結型景観デザインを可能にする方策の提案を行っており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。